

わさびナの冬期無加温ハウス栽培技術

山形県置賜総合支庁産業経済部農業技術普及課産地研究室

研究のねらい

置賜地域ではわさびな栽培の導入が進んでいるが、栽培指標が無いため、生産性のバラつきがあることが課題となっている。そこで、夏秋作品目（ミニトマト等）や水稻育苗との組合せを考慮しながら、高収量を得るための播種時期、栽培体系（直播、定植）を明らかにした。

研究の成果

- ① 9月中の作付けが可能な場合は、直播体系^{※1}とし、9月末までに播種すると約730kg/aの収量を得ることができる。また、農業用ポリエチレンフィルム（以下、農ポリ）のトンネル被覆による保温と緩効性肥料^{※2}による全量基肥^{※3}施用を組み合わせることで、現地慣行（不織布トンネル被覆、現地慣行施肥）と比較して10～20%の増収が見込める（図2）。
- ② 作付けが10月以降の場合は、育苗-定植体系（128穴セルトレイ）とし、10月下旬までに定植すると700kg/a以上の収量が得られる（図2）。この体系では、緩効性肥料による全量基肥施用、農ポリトンネル被覆を実施する。
- ③ 農ポリ（0.05mm）をトンネル被覆し保温管理することで、凍害を防ぐことができる（図3）。

※1 直播体系：圃場に栽培ベッドを作成した後、直接種子を播いて栽培、収穫をする体系。

※2 緩効性肥料：時間をかけて徐々に溶けるように作られた肥料。 ※3 全量基肥：必要な肥料を作付け前に全て入れること。

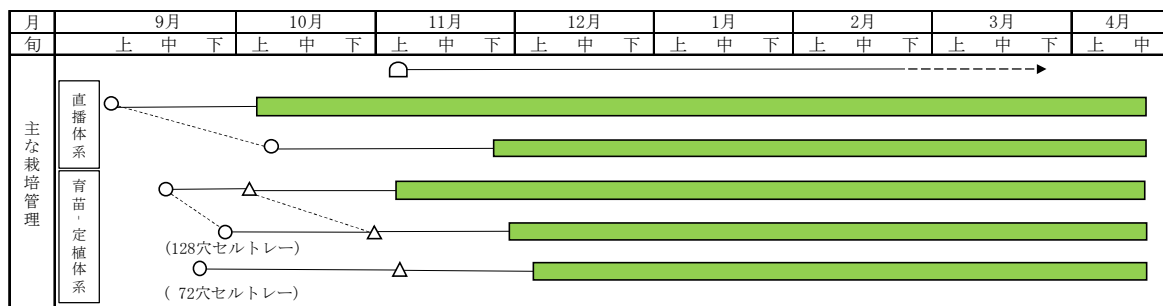


図1 わさびな冬期無加温ハウス栽培の栽培暦

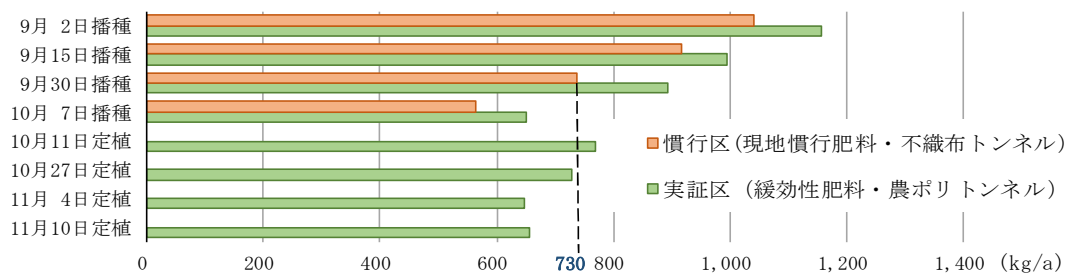


図2 播種・定植時期と収量 * 11月10日は72穴セルトレイ苗を定植



図3 凍害の状況 左：凍害あり（不織布トンネル）、右：凍害無し（農ポリトンネル）